

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.34

「サウンドスケープ協会」の音やうた

昨年八月二十一日、「サウンドスケープ協会」の皆さんが、浜松市での研修会の一環で、「波小僧」伝説について、地元ではどのように伝承されているか訪ねて来られた。浜風会としても有意義な話し合いになったので紹介する。

「サウンドスケープ協会」とは

(同協会HMを参考)

「サウンドスケープ」を日本語で「音の風景」と訳し、音の世界を正しく把握し、より良い環境と持続可能な社会のあり方を追究する等、音に興味をもつあらゆる分野の研究者、教育者、音楽家、企業の方、そして生活者の情報交換を目的に平成五年に設立された任意団体である。

「波小僧」は音風景百選の一つ

平成八年、環境省が「残したい日本の音百選」を選定し発表された。選定検討会メンバーの中に、今回お越しの鳥越けい子様が居られ、現在この協会の理事長をされている。

その百選に選ばれた正式名称は「遠州灘の海鳴・波小僧」である。

その紹介記事から。

遠州灘一帯で天気の変わり目「ゴオー」「ザアー」「バシン」等と突然鳴り出しては、鳴りやむ不思議な海鳴、人々は親しみを込めて「波小僧」と呼び、東から聞こえれば天気がくずれ、西から聞こえれば良くなると言い伝えられている。遠州灘一帯は砂丘も美しいと付記されている。波の音がよく聞ける所は、浜岡砂丘、竜洋海岸公園、中田島砂丘、舞阪町表浜等と。

「波の音は」生活の一部であった

この篠原地区では、「波小僧」という認識は薄かったが、「波の音」は生活の一部にしみ込んでいたと、この懇談会の中でお話した。それは昭和49年発行の篠原小学校開校百年記念誌『波の音百年』に如実に伝承されている。この地域は半農半漁で暮らしていた時代が長く続いた。特に明日の漁をどうするか、明日の天気はと、音にかかわらず自然の現象に全神経を使っていた筈である。ましてや天気予報が十分でない時代、周辺の雑音もほとんどない時代には「波の音」をしっかりと聞いて、生活に活かしてきたことだろう。



サウンドスケープの皆さんと浜風会メンバー

それが明治22年、東海道線が開通し、昭和36年に1号線新国道が開通、昭和40年台後半から車社会到来で車が増え、更に昭和53年には「浜名バイパス」が開通した。それら徐々に増えた騒音は「波の音」を知らず知らずのうちに聞きづらくしてきた。

一方この篠原地区では海での仕事が無くなるにつれ、「波の音」への関心も少なくなった。また昨今の天気予報の確かさは、TVの雲の動

きまでいつでも視ることが出来る等、台風到来時等にはよく聞こえるので耳にするが、常には意識していないのが現状になってしまった。

舞阪町には「波小僧」の石像

隣の舞阪町には太鼓をかかえた、かわいい「波小僧」が、松並木公園に座っている。いうまでもなく舞阪町は漁業の町である。「波の音」には今なお関心をもっている表れであろうか。「波小僧」はもともと怖いものではないか等、この懇談会でも話題になった。その他地域でも様々な伝承があるようだ。(省略)

懇談会を終えて

いろいろな大学の教授から作曲家、マリンバ奏者を含む10名の方がお見えになったが、その日は、ちょうど台風20号が到来する直前で、「波の音」を聞く絶好の機会になり、会場の篠原協働センターに来られる前に、舞阪の海岸まで出てそれを体感され、また舞阪の「波小僧」像も見て来られたようだ。このような音についての真剣な取組に感動させられた。

これを機会に、地域における音についても一度耳を澄ましてみたいものだ。今は聞けなくなった音についても、何かあるだろう。掘り起こしてみたら面白い。今回の「サウンドスケープ協会」の取組みについて見習っていくことは多い。

浜風会は地道な活動の成果か、今回のように篠原地区以外の方から、お声がかかることが多くある。中身の充実と幅広い展開を目指していかねばならないと感じさせる一日でもあった。(山下勝彦)

第34号、他頁の紹介

- 2頁：篠原玉葱の発祥
- 3頁：舞阪駅 消防組
- 4頁：虫供養、「百八万遍」

篠原玉葱の発祥について

篠原玉葱は全国一の早出し玉葱として、順調に成長、発展していると言える。特に最近では新規就農者も増加し、畑の大規模化、集約化も進み、耕作放棄地が大幅に解消して、いっそうの飛躍が期待できるところである。

それではそんな篠原の玉葱がどのようにして始まったかに焦点を当ててみてみる。

篠原に最初に移入したのは愛知県の人

『篠原村農会農業会記録』によれば、明治44年愛知県知多郡八幡村から万歳楽を奏でつつ、この地に来た加藤音吉という人が、その後篠原村の字田畑に住むようになり、現在の愛知県知多市八幡町から玉葱の種子を移入したことから、篠原の玉葱栽培が始まったと言われている。玉葱が日本に導入されたのは、明治に入ってからで、北海道では「札幌黄」、大阪では「泉州黄」、愛知では「愛知白」と導入した地方の気象や土壌に適した土着品種が誕生していた。篠原の玉葱はこうして白玉葱の栽培から始まった。



加藤音吉氏



浜名郡農会長よりの表彰状

玉葱を特産物化したのは大正11年

愛知県から種苗を移入した篠原の玉葱は、加藤氏らの工夫、改善を経て、土地の気候風土に適したのか次第に作付面積を増加していった。そして大正10年篠原村農会は、玉葱を篠原の特産物とするために、翌年より種子を和歌山県から取り寄せ、農家に斡旋することにした。それにより大正11年二十五haの面積から約六百トンの収量をあげることが出来、玉葱の特産地はスタートしたのである。

品種は当時のイエロー・グローブ・ダンバーズ(黄玉葱)で、東京、横浜、大阪、浜松市場へ販売され好評だったと記されている。その後順調に作付面積を増やしていき、最盛期の昭和17年には百四十haから七千トンを超えた。当時から甘味が多く都会の料理店において歓迎されていたようだ。

されていた。

加藤音吉氏表彰される

昭和13年、浜名郡農会会長より、多年の農事の改善努力による功績顕著にして、篠原村を中心に浜名郡に玉葱の盛況をもたらすべく、農産物創成上特筆大書すべき事として表彰された。加藤氏は篠原玉葱の基礎を築いた恩人と言えるだろう。

篠原玉葱発展のポイント

戦後、全ての面で大きな変革があった。玉葱栽培の環境面でも、土地改良、三万原用水の敷設で機械化が一気に進んだことのほか農業離れが一時進んだ苦しい時機もあった。その中で篠原玉葱がここまで発展してきた要因は次の三点ではなからうか。

① 自家採種による品種の改良

昭和28年から自家採種が始まり、形質改善を通して収穫時期の早出し化、毎年繰り返す母球選抜で、五月頃出荷していた玉葱が、今では一月出荷まで可能になり、日本一の早出し玉葱が誕生したのである。また形状も甲高品種に改善され、味も甘いと高く評価されている。

② 農地利用集積円滑化事業の活用

平成21年「浜松市南部地区農地利用調整協議会」の発足により、とびあ農協が「とびあふぁー夢」を発足させ、農地の貸借を調整することで、農地の流動化・集積が一気に進み、担手の育成等着々と成果をあげている。

③ 玉葱栽培に最適な土地、風土

早出し、甘い美味しい玉葱として市場から高く評価され、また新規就農者にも魅力的な仕事に可能なしているのは、篠原の土地が玉葱栽培に適した土壌であることを忘れてはならない。守っていききたいものだ。

(山下勝彦)

虫供養「百人萬遍」

昔私の住んでいる地域の人が集まり、数珠を廻して何か願い事をお祈りする行事がありました。二十年前までは部落毎に盛んに行われていたようです。当番は周り番で私が当番だった時を思い出して乍ら、近所の人にも聞いてまとめてみました。

国方で行っていた実際の様子

昔は自給自足で農作業が盛んだったので、十一月から十二月になると、農作業で殺虫した虫の供養として「虫供養」の習慣がありました。当日は床の間に、保管していた箱の中に入れてある掛軸と大数珠を取り出して供養の準備をします。そして「十三仏」の掛け軸を掛け、祭壇には、お花、ご飯、煮物、漬物、果物等を供えます。そしてなむてんの木を用意し、削ったところに、菩提寺の和尚様に「南無阿弥陀仏」



とお題目を書いていただいた「南無大の木」を立て、近隣の人十名から二十名の人達が座り、和尚さんによる供養をしていただきます。



それが終わった後、当日集まった人達みんなでお題目「南無阿弥陀仏」を唱えながら数珠を廻します。大数珠の玉が廻ってくると、その人が頭を下げて数珠を



出前のお寿司を食べているところです。外に出る機会が少なかった女性にとつて、世間話が弾む楽しい憩いの場でした。

感じたこと

重かった大数珠を、みんな協力して廻しながら、虫の成仏を願って供養した昔の人達の温かな人間性と、地域の人達の強い絆を感じました。

(鈴木坂江)

押し頂きます。数珠を一周廻す都度、マツチ棒を置き、20個位だったか数えたことを思い出します。

終わるとおくとで炊いたご飯や味噌汁、そして自家製の漬物等を一人用の黒塗りのお膳の上を用意して出されます。写真は

浜風会会報第34号
篠原協働センター同好会「浜風会」
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 委員長 山下勝彦
鈴木忠 鈴木理市
藤田博辞 山中道弘
発行責任者 山下勝彦
発行平成31年1月1日